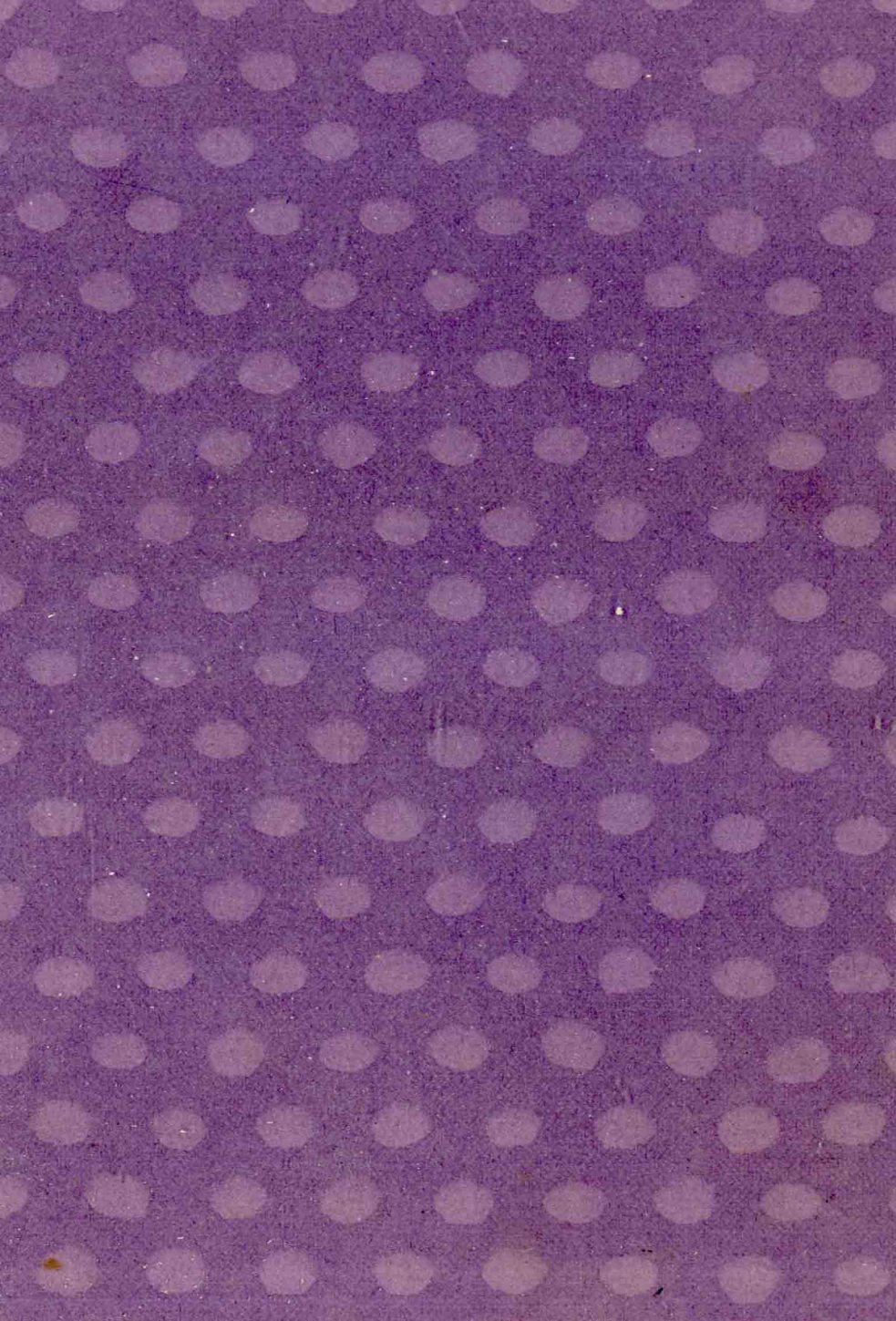




井戸の星

吉行理恵

講談社

井戸の星

昭和五十六年二月二十日 第一刷発行

著者——吉行理恵

© Rie Yoshiyuki 1981, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—四四—二二 (大代表)

振替東京—三〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社大光堂

定価——一二〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。

目次

井戸の星 5

針の穴 35

妻の犬 65

沈んだ寺 103

蜘蛛 129

青空 159

海豹 189

トラヴィアタの鏡 229

あとがき 256

初出一覧 262

装幀
中島かほる

井戸の星

井戸の星

「一つも恋愛しないで、結婚するなんて」

双生児の姉章子しょうに見合いの話が持ち込まれたとき、妹は反対した。

「そうね、私、お見合いしないわ」

と、章子は言う。

双生児といっても、二人は誕生日が違う。妹が生まれたのは十月二十三日の二十二時過ぎだったが、章子は二時間遅れて、二十四日に生まれた。容貌は似ているが、性格はかなり違う。占いにこっている母は、一日ちがいで妹はてんびん座に属し、章子はさそり座に入る。性格が違うのだと言う。妹には蛇、章子には牛の守護神がついていて、妹は陸でも水中でもすいすい動けるのに、章子は受け身なのだとも言った。

子供のころ、二人はジャンケンでおやつを貰うことになっていた。章子が勝って、大きい桃をとったとき、好物だったので、妹は悔しそうな顔をした。それから桃が出ると、章子は自分が勝っても小さいほうをとった。

いじめっ子に章子がいじめられると、妹はしかえしに行った。小学校の帰りに別れるときジャンケンをして、勝った方が「ジャンケンポン、オミヤゲ三ツ、タコ三ツ」と言いながら叩くのがはやっていた。妹は章子をいじめる子には特別痛くした。章子はコツコツと勉強をし、クラスで一番の成績だった。妹はあまり勉強せず、三、四番だった。

休み時間に、妹は運動場で蝶を見付け、どこまでも追いかけて行った。教室に戻ってみると、授業が終わりかけており罰として黒板の前に一時間立たされた。あとで、先生が妹に言った。

「恥ずかしかったでしょう」

「恥ずかしくななかないですよ、だって、いつもみてる顔ばかり並んでるんですもの」

一年三学期の終業式の日、先生に章子だけ教室に残るように言われた。廊下から窓越し

に生徒たちは教室の中を覗いていた。

「章子ちゃん、この一年間成績が一番でおめでとう、でも、返事をするとき、もっとはっきりしたほうがいいわ」

章子は怖くていまにも泣き出しそうな表情だった。

二人はクラスの人気者だったが、妹には、男生徒が集まり、女生徒は章子のほうを好んでいるらしかった。男生徒から妹は名前や愛称で呼ばれたが、章子は苗字でしか呼ばれなかった。「私、どうしてあなたのように名前や愛称で呼んでもらえないのかしら……」と、章子は妹に訊ねたことがあった。

少女のころから、ラブレターがくるようになった。妹はニコニコしながら読み、読んでしまうと、

「手紙はウンコよ」

と、捨ててしまうのだった。

妹は自分に好意を示す人には誰にでも優しくする。

章子には、ときどき女生徒からラブレターが来た。すると、封を切らずに母に渡し、全

部箱にしまっておいてもらった。

見合いの話が章子に持ち込まれたとき、姉妹は高校を卒業したばかりだった。その苗字は、姓名判断の本に、苦勞すると出ていると母は眉をひそめた。それから三年経ち、母が妹に言った。

「あなたは男友だちが多くて心配だけど、章子みたいに男友だちがなさすぎるのも心配ね」

結局、一度も恋愛をせず、二十一歳になって、章子をはじめて見合いをした。相手は、章子が十八歳のとき知人からすすめられた見合いの相手と同一人で、一度章子を道でみかけて、気に入る、結婚せずに待っていたという。

「大塚（見合いの相手）さんはお金はないけれど、実直な家庭で育ち、一流大学を出て官吏になったのよ、おとなしそうな青年ですから、章子さんにはいいとおもいます」

と、知人がすすめる。

「私、結婚します」

四年前、姉妹の父が亡くなり、多額の財産が母と娘たちに遺されたが、母は働いたこと

が一度もなかったし、病弱なので、早く娘たちを嫁がせたいと願っていた。章子の意志が堅いのを知ると反対しなかった。大塚が結婚の時期をいそぎ、半年後に結婚することになった。結婚式が近づくと、章子とはっておいいたラブレターを庭で燃やした。

母は姑と義妹が間借りしている家に章子が行くのを心配し、自分たちと一緒に章子夫婦を棲まわせた。平屋だが、部屋数が多い。

妹は子供るとき章子と一緒に使っていた子供部屋を自分の居間になっている。その部屋は、道路に面しているが、一番日当りがよい。

「入ってもいいかしら」

と、扉の向こうから章子が妹に訊く。

「どうぞ、ここは、お姉さんの部屋でもあるのよ」

章子は太陽の光に背を向けて坐る。

「どうですか、結婚生活は」

「フフフ」

そのとき、大塚の張りのあるよく響く声が廊下越しに聞こえてくる。

「お邪魔していませんか」

章子はすーと立って、帰って行く。

日曜日なので、大塚が上役についてゴルフに行ってしまうと、姉妹はまた話しはじめる。玄関の呼び鈴が鳴った。二人が出てみると、大塚の母が立っている。大塚の母は若いころ美人コンテストで優勝したことがあったというだけあって、顔だけは整っているが、ぎすぎすした感じがする。

「ちょうどこちらのほうにくる用事がありましたので、ちょっとお寄りしましたの、松茸を沢山戴いたものですから、召上ってください」

「ありがとうございます。どうぞお上がりください、生憎、母は散歩に行っていますが……。大塚さんはゴルフに」

「今日はここで失礼しますわ、これから親戚まわりをしようとおもうんです、章子さん、一緒に行きませんか？」

と、大塚の母は優しそうな口調で誘う。章子は曖昧に頷く。二人は並んで出て行く。

恋愛を重ね、妹は二十四歳で修一郎と結婚した。

妹は女子だけの美術学校に通っていたころ、母に内緒で学生運動に加わり、集会で理工学部の大學生修一郎と出会った。修一郎を一目視たとき、章子の夫にしたいとおもった。

——そうになったら楽しいわ……。妹はにっこりした。妹には一年前から交際していた恋人があり、気に入っていたが、求婚されても曖昧な返事しかできなかった。美術学校を卒業してからしばらく妹は修一郎と会う機会がなかった。二人はメーデーの日に再会した。妹が国会議事堂付近を会社の人たちと歩いていると、修一郎が不意に近づいて来た。妹は列から離れ、二人は短い立ち話をした。列に戻ろうとした瞬間、修一郎が求婚した。

とりあえず、二人は、母、章子夫婦と同居することにした。八畳間を修一郎の書斎、二人の寝室に六畳間を使うことにしたが、妹はいままでどおり子供部屋に居る時間が多い。

このごろ、母は章子のことを頼むと頻りに妹に言う。しばらくして、母が亡くなった。妹は悲しくて力が抜けてしまったみたいによやーとしているが、章子は静かな物腰で通夜の客たちに気を配っている。

葬式の手伝いに来た大塚の母はそのまま一ヵ月ちかく泊っている。

アメリカの大学で勉強することになった夫に妹はついて行くことになった。四年後、帰国すると、羽田空港に、章子、大塚、大塚の母が迎えに来ている。

「壁も塗りかえてきれいにしておきましたよ」

と、大塚の母は言う。家に戻ると、壁に沢山の泥が投げつけてある。大塚の母と大塚はバケツやモップなどを持ってくると、いきいきとして、手際よく泥をとる。章子が、手伝おうとすると、「ここは私たちでいたしますから」と大塚の母に一蹴されてしまい、ますます章子はうろろする。たちまち、壁は前よりもきれいなくらいに掃除されてしまう。

子供部屋を、章子の三歳の娘が使い、母の部屋は、大塚の母に使われている。半年経ち、妹夫婦はまた外国で生活することになり、戻るまでに小さな家を捜しておいてほしい、と修一郎は友人に頼んだ。

帰国した日、新しく借りた家の門に、沢山の泥が投げつけられている。

「近所の悪戯小僧がしたのかな」

「酔っ払いかしら」

と、妹夫婦は話しあった。

翌日、章子に妹は電話をかけた。章子は妹に羽田に迎えに行けなかったことを詫びた。しかし、理由は言わなかった。妹は門に泥を投げつけられたことを言いつけた。章子のびっくりにした声が聞こえてくる。二人は久しぶりに会うことにした。